

学位論文「近世村落の領域と身分 一民衆世界の有界化」(要旨)

関口 博巨

本論文は、「民衆世界の有界化」という観点から、近世の村落領域と村内身分について検討したものである。村請制村落の編成と生活のムラの線引きは、必ずしも一致しない。政治行政局面における「有界化」と生活局面における「仕切り」は、どのようにせめぎ合い、互いに受け入れ合っていたのか。空間や人間関係の分割の仕方に着目して、近世社会の特質を読み解いていく。

以下のとおり、本論文では個別分析一〇編を三部に分けて収録した。

序章 問題の所在と本書の構成 (新稿)

第一部 村の構造と「村」領域一村の仕切り一

第一章 関東の「村」と百姓土地所持一武州志多見村を中心に一

原題「近世関東の「村」と百姓土地所持一武州志多見村を中心に一」(歴史学研究会編『歴史学研究』第六二八号、一九九二年)

付論 土地慣行にみる「ムラの自力」一高請地所持の性格一 (新稿)

第二章 関東の「村」と村運営

原題「近世関東の「村」と村運営」(地方史研究協議会編『地方史研究』第二四一号、一九九三年)

付論 賤民の「村」と弾左衛門支配一境界の住人たち一 (新稿)

一部「弾左衛門支配とその境界」(白川部達夫・山本英二編『〈江戸〉の人と身分 第2巻 村の身分と由緒』吉川弘文館、二〇一〇年)の改稿を含む

第三章 瀬戸内海における「島村」の形成一伊予二神島の近世一

原題「伊予二神島の近世一瀬戸内海における「島村」の形成一」(神奈川大学日本常民文化研究所・共同研究『〈論集〉「瀬戸内海の歴史民俗」』二〇一六年)

第二部 百姓と従属民一身分の仕切り一

第一章 奥能登における「下人」化の諸契機一近世前期の時国家の「下人」を中心に一

原題「近世前期奥能登における「下人」化の諸契機一時国家の「下人」を中心に一」(神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』第一〇号、平凡社、一九九三年)

第二章 奥能登における「下人」の職能と生活一時国家の「下人」たち一

原題「近世奥能登における「下人」の職能と生活一時国家の「下人」たち一」(国史学会編『国史学』第一五〇号、一九九三年)

第三章 甲州山村の家抱とその「自立」一西河内領福土村の事例から一

原題「甲州山村の家抱とその「自立」一西河内領福土村の事例から一」(山梨県史編

纂委員会編『山梨県史研究』第五号、一九九七年)

第三部 身分社会の越境者——仕切りの透過性——

第一章 ムラと越境者の近世史・素描—豆州伊東からの定点観測—

第二章 寛政三年の陰陽師騒動

原題「旅人・温泉・村・身分—近世伊東の村落社会史—(上)」(伊東市史編纂委員会編『伊東市史研究』第七号、二〇〇八年)を分割し大幅に改稿

第三章 屋敷墓・持仏堂・道心者——武州志多見村松村家の地蔵堂を中心に——

原題「近世一名主家の屋敷墓・持仏堂について——武州志多見村松村家を中心に——」(史窓会編『大平台史窓』第一一号、大塚書店、一九九二年)

第四章 江戸地廻り経済の展開と近江商人—旅する商人の共同体—

原題「近江日野商人の進出」(吉川市史編さん委員会編『吉川市史 通史編 I 原始・古代・中世・近世』第四編第四章第四節、二〇一四年)

終章 本書の総括と展望(新稿)

序章 問題の所在と本書の構成

序章では、幕藩制構造論以降の近世村落史研究をひと通り整理した。現在、幕藩制構造論をかかげる研究はほとんど見られない。とはいえ、いまでも近世史研究の共通理解・ベースには、安良城盛昭の太閤検地論や佐々木潤之介の小農自立論があるといわれている(塚田孝・青木美智男ほか)。しかしながら、近年の中近世移行期研究(勝俣鎮夫・藤木久志・池上裕子・田上繁ほか)や慶安軍役令の再検討(根岸茂夫・山本英二ほか)に学ぶならば、幕藩制構造論は、その事実認識自体が見直しを迫られている。

そこで本論文では、「村の仕切り」「身分の仕切り」「仕切りの透過性」という三つの視点から、近世のムラと身分について検討した。検討にさいしては、網野善彦・泉雅博・白水智・佐藤孝之らの百姓論や村落論を参照した。

第一部 村の構造と「村」領域—村の仕切り—

近世「国家」は社会・経済諸関係をさまざまな「領域」に「有界化」した。その代表的な領域が、検地をへて成立した村である。だが有界化された村と、その住人たちによって仕切られた「村」(地域によって「耕地」「庭場」「坪」「谷津」などと呼ばれる)は、かならずしも一致するものではなかった。

一村多集落型の関東地域のムラ社会は、〈a小「村」—b「村」—c大「村」=村—d大「村」団=組合村〉という重層構造を形成していた。b層の「村」は百姓個人の訴願を媒介し、「村」の「惣代」「役人」がc層の村運営を支えた。またムラ社会には「村」の土地は「村」のものという意識、百姓個人の所持地にも共同地的性格(私的所持と共同的所持の両立)などがあった。「村」は日常の濃密なつきあい関係や冠婚葬祭における互助関係の基盤でもあった。「村」はムラの自力を担う根源ともいえる共同体であった(以上、第一章・

第二章)。

なお村ないし「村」のあり方は、地域や身分によってさまざまであった。たとえば一村一集落型が多い畿内のムラは、村と「村」の一致傾向が予測される。また瀬戸内海には、複数の島の支配を根拠として海域を領域化していた、「島村」ともいうべき村が存在していた(第四章)。また村の中の「村」には、「町」と呼ばれた場所(第三部第一章)、下人や家抱が集住した場所(第二部第二章・第三章)、被差別民が住まわされた場所(第二章付論)などもあった。

第二部 百姓と従属民—身分の仕切り—

一七世紀以降の村では「小農自立」が達成され、小農民の村が幕藩権力の基礎構造をなしたといわれる。だが有界化された村は、かならずしも小農民のフラットな共同体だったわけではなく、地域によっては下人・家抱・名子・被官などと呼ばれる従属民も存在した。近世のムラ社会には身分の仕切りも存在していたのである。

日本列島の社会では、多数の奴隷労働を使役するプランテーションのような大経営は想定できない。下人を抱えた大百姓の多くは、廻船業・漁業・鉱山業・林業など、海や山などの立地・環境に即応した経営を展開していた。大百姓のイエは企業体ともいうべき集団を形成し、地域社会のセーフティネットの役割をも果たしていた(第一章・第二章・第三章)。

従属民が百姓身分に「自立」することはあるが、それが農業生産力の上昇による「成長」の結果とは限らない。「自立」とされる事象を検証してみると、百姓身分化の理由が、イエ企業体の経営破綻や不奉公による解雇であるケースが多い(第三章)。本論文ではこれを、「小農自立」ではなく「小経営分立」と捉えておきたい。

以上の検討を踏まえるならば、下人や家抱などを農業奴隷や農奴と理解し、その存在をただちに後進地の証明とすることはできない。百姓＝農民論、自然経済から市場経済への発展段階論など、これまでの前提としてきた枠組みを改める必要がある。

第三部 身分社会の越境者—仕切りの透過性—

近世のムラ社会は、領主によって有界化された村請制村落、自らの仕切りとしての「村」、大百姓の「家」を構成する主人-下人関係など、無数に区画されていた。だがその区画は鉄壁の厚い壁だったわけではなく、ムラ社会が存続するために、一定の「透過性」を確保していた。

たとえば一七世紀の伊東地域には、江戸開府による経済効果を見込んだ多数の西国商人たちが訪れ、やがて百姓として定着していった。一八世紀以降になると、ムラ社会の百姓株も固定し、移住者が成員権を獲得することは困難になっていく。ムラの間隙を往来する越境者たちの相貌にも変化がみられる。

一八世紀以降、社会問題化した越境者は、宗教者・勸進者・浪人などであった。彼らが

ムラに持ち込む信仰・文化・暴力は、「飛上り之心」を抱いた若者〈百姓ではない村人〉に影響をおよぼし、ムラの規範や文化を攪乱する要因にもなった。

越境者のなかには、広域的なネットワーク共同体を形成した近江商人などもいた。たとえば武蔵国で醸造業や金融業などを展開した日野商人は、江戸地廻り経済のハブのひとつとして機能した。彼らの経営はネットワーク型共同体「日野大当番仲間」に支えられ、「よそ者」のまま異郷の地になじみ、出店先の地域経済を牽引した。彼らのなかには、本店所在地と出店先の双方に身分を獲得していた者もいる。

ムラ社会の仕切りには透過性があり、多くの移動者が行き来していた。近世の経済と文化の発展は、必ずしも農業生産力の発展の結果ではなく、当初から存在していた仕切りの透過性によっても支えられていた。

終章 本書の総括と展望

各部の論点は上述のとおりである。これらの論点をふまえるならば、仕切りの史的意義とムラ社会の性質は、幕藩制構造論・社会構成体論を離れて、以下のように理解することができるだろう。

近世の人々は、生き残っていくために、何らかの仕切りの内側に入ることが求められた。仕切りとなったのは、行政上の村境だけでなく、地域社会に重層するさまざまな次元のムラであり、多様な身分集団であった。しかもその境界（仕切り）は、しばしばせめぎ合い、氾濫原の河道のように変更をくりかえした。